

## P1-039

## 慢性疾患の子どもが過ごす場所である地域の学校の管理職による健康のとらえ方・守り方

金丸 友<sup>1</sup>、吉野 純<sup>2</sup>、杉本 晃子<sup>3</sup>、西田 志穂<sup>3</sup>、  
飯村 直子<sup>1</sup>、原 加奈<sup>1</sup>、西村 実希子<sup>3</sup>、  
三池 純代<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 秀明大学看護学部、

<sup>2</sup> 日本赤十字看護大学さいたま看護学部、

<sup>3</sup> 共立女子大学看護学部

## 【目的】

学校の管理職の、学校における慢性疾患の子どもの健康のとらえ方や健康の守り方を明らかにすること。

## 【方法】

首都圏にある2つの公立小学校の校長2名と副校長1名に対し、子どもの健康に対する考え、子どもの健康に関して行っていることなどについて半構成的面接を行い、民族看護学の手法を参考に分析した。所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 【結果】

1. 健康には「体の面と心の面」があり、その両方がよい状態が健康である

健康には体の面と心の面があり、これらは相互に関連し合うと考えていた。そして、両方がよい状態であることを目指していた。

2. いろいろな「特別扱い」があり、その一つが病気である

病気をもつ子どもを特別扱いするのではなく、それぞれの特徴に応じて子ども全員を特別扱いしていた。特別扱いするときは、子どもに気づかれぬように心掛けていた。

3. 命に関わることを最優先とし、学校全体でフォローする体制を整える

学校での対応は、命に関わることを最優先としていた。中心となって関わっている人が不在でも、安全に対応できる体制を整えていた。また、うまく対応できない人がいても誰かがフォローできる体制にしていた。

4. 管理職としての役割がある

健康管理の責任は管理職にあり、判断は管理職が行うと考えていた。設備面を整えたり、人員増加を申請したりするなど管理職ならではの役割があった。

5. 子どもが自分やクラスメートの体調の変化に気づいて報告できることが、子どもの健康を守ることにつながる

子ども同士が最も身近にいるため、自分やクラスメートの体調の変化に気づいて報告できるように教育・整備していくことが、慢性疾患の子どものフォローにつながると考えていた。

6. 保護者との信頼関係を崩すわけにはいかない

学校生活を調整するときは、これまで築いてきた保護者との関係を崩してまでも進めることはなかった。医療施設との連携も、保護者を通して行っていた。

## 【考察】

校長らは、保護者とのこれまで築き上げてきた関係を大切にしながら、病気を子どもの一つの特徴ととらえて、命に関わることを最優先として、学校全体でフォローする体制を作っていた。本研究で明らかとなった管理職が大切にしていることや学校の体制を理解した上で、学校との連携を図ることが大切である。

本研究は JSPS 科研費 18K10483 の助成を受けて実施した研究の一部である。

## P1-040

## 保健指導における特別支援学校養護教諭の専門性に関する文献検討

山岡 千鶴、小西 美和子

兵庫県立大学 看護学部

## 【緒言】

特別支援学校は重複障害のある児童・生徒数は増加傾向にあるだけでなく、障害の重度・重複化、多様化が進んでいる。また、インクルーシブ教育の推進により特別支援学校に限らず、通常校においても障害のある児童・生徒が在籍している。そのため、日常の学校生活などに関する養護教諭の保健指導の専門性は拡大・発展しているが、その現状と課題は明らかとなっていない。

## 【目的】

特別支援学校養護教諭に関する国内文献を整理し、保健指導の現状および課題を明らかにする。

## 【方法】

医学中央雑誌 Web を用いて、「特別支援学校」「養護教諭」をキーワードとして2010年から2021年までの会議録を除く原著論文の検索を行った。抽出された64件の文献のうち、分析対象論文は11件であり、本研究の目的内容に沿って現状と課題を抽出し、質的に分析した。

## 【結果】

保健指導における特別支援学校養護教諭の専門性に関する文献は0件であった。主に医療的ケアにおける養護教諭の役割、看護師などの多職種との連携・協働、ケア技術の習得に関するニーズ、コーディネーション能力、発達段階や障害特性などを考慮した視力測定、健康診断、歯磨き指導、肥満指導、初経教育などの対人管理に関するものであった。研究のほとんどは質問紙による実態調査であり、保健指導における特別支援学校養護教諭の専門性は抽出されなかった。

## 【考察】

保健指導における特別支援学校養護教諭の専門性を明らかにするためには、増加傾向にある医療的ケア児だけでなく、“みること”、“きくこと”、“話すこと”等に障害をもつ児童・生徒も含めた幅広い視点での疾病や障害を踏まえた日常の学校生活への具体的な支援内容を示す必要がある。そのため、エスノグラフィ調査やインタビュー調査などを用いたデータ収集を実施していく必要がある。また、一人職である養護教諭の活動は顕在化しづらいため、管理職を対象としたインタビューによる養護教諭への期待、客観的評価も同時に行う必要があることが示唆された。